

中越方言の音韻分析

廣 田 康 子

はじめに

本論では、窪蘭(1998)で紹介されている音節の重音節化という現象が、中越方言ではどのように起きているかを考察する。分析対象は、大橋勝男の『新潟県方言辞典』(2003)に記載されている語、また筆者自身が新潟県長岡市(中越方言の区分に属する地域)で耳にする語とした。

日本語では、大きく母音脱落・母音挿入・子音脱落・子音挿入の4つの方法で重音節化が行われている。子音を残して重音節化が行われることが多い点から、東日本方言は子音優先の言語と言われ、対して西日本方言は母音優先と言われることがある。その点、中越方言では母音、子音に関わらず、日本語で観察されるすべての重音節化が顕著にみられる。さらに、いくつかの例から、東京方言と比較して重音節形成がより頻繁に行われていることを示す。

1. 先行研究(音節構造制約)

窪蘭(1998)は、人間の言語にしばしば見られる一つの傾向として重音節を好む傾向があると述べている。この傾向を示す言語では、いくつかの方法によって軽音節や超重音節を避け重音節が作られる。すなわち、(C)Vや(C)VVCといった音節構造から(C)VCまたは(C)VVという音節構造への変化が起きている。窪蘭は、この傾向を、「1モーラの強勢音節を禁止する」「3モーラの強勢音節を禁止する」という音節構造制約によるものと分析し、英語と日本語における重音節化の例を示している。

1.1. 英語における重音節化

1.1.1. 閉音節短母音化

閉音節短母音化とは、強勢(アクセント)の置かれた音節で、さらにそれが閉音節であった場合、その音節の母音が短くなるという現象である(VVC→VC)。

kep.te /CVVC.CV/ → kep.te /CV_C.CV/ (→ kept /CVCC/)
 gon /CVVC/ → gon /CV_C/ (→ gone /CVC/)

長母音であった母音が、閉音節短母音化により短母音になっている。それによって、超重音節構造から重音節構造が形成されている。

1.1.2. 開音節長母音化

開音節長母音化とは、強勢の置かれた音節が開音節であった場合、その音節の母音が長音化するという現象である (V → VV)。

fa.der /CV.CVV/ → fa.der /CVV.CVV/ (→ father /CVV.CVV/)
 hwa /CCV/ → hwa /CCVV/ (→ who /CVV/)

短母音だった母音を長音化することで、軽音節を避け重音節を形成している。

1.2. 日本語における重音節形成

1.2.1. 母音の短音化

外来語において、英語の鼻子音が日本語に取り入れられた際、それが尾子音つまり撥音となるとき、母音の短音化が起きる (VV → V)。

range /CVVC.CV/ → レンジ /CV_C.CV/
 foundation /CVVC.CVV.CVC/ → ファンデーション /CV_C.CVV.CVC/
 green peas /CCVVC CVVC/ → グリンピース /CV.CV_C.CVV.CV/

英語の音節構造をそのまま取り入れるならば、2 モーラ分の長さを持つ母音が撥音の前に登場するはずである。しかしながら、ここでは超重音節となる音連続を、短母音化することで重音節にとどめている。

1.2.2. 母音の長音化

数字や曜日の 1 モーラ単音節語では、母音の長音化が顕著にみられる。

5・15事件 /go i.ti go/ /CV CV.CV CV/ → /go: i.ti go:/ /CVV CV.CV
CVV/

月火 /ge.tu ka/ /CV.CV CV/ → /ge.tu ka:/ /CV.CV CVV/

このような長母音化は、関西方言ではよく観察される。1 モーラ単音節の名詞を、関西方言では2 モーラ分の長さで発音する。

目 関東方言：/me/ 関西方言：/me:/

木 関東方言：/ki/ 関西方言：/ki:/

なお、長母音化は2 モーラ単音節語では観察されない。これは上記で示した長音化が、軽音節1 つだけから成る語を避けようとして起きたためであると考えられる。

1.2.3. 音便

日本語には、子音が脱落して変化の起きるイ音便・ウ音便と、母音が脱落する撥音便（撥音化）・促音便（促音化）が存在する。

イ音便：ka.ki.ta /CV.CV.CV/ → kai.ta /CV V.CV/

ウ音便：yo.ku.ko.so /CV.CV.CV.CV/ → you.ko.so /CV V.CV.CV/

撥音便：no.mi.te /CV.CV.CV/ → non.de /CVC .CV/

促音便：mo.ti.te /CV.CV.CV/ → mot.te /CVC .CV/

それぞれ子音や母音を脱落させることによって、軽音節から重音節を形成している。イ音便・ウ音便と撥音便・促音便は、脱落するものがそれぞれ子音、母音と全く正反対の変化のように思われるが、軽音節構造であったものを重音節化するという点からみると、共通性を持った現象であることが分かる。

以上のように英語・日本語の例を通して、重音節が好まれるという傾向があることが分かる。次節では、中越方言にみられる重音節化について述べる。

2. 中越方言における重音節化

2.1. 母音脱落

まず母音脱落による変化である撥音化と促音化についてみていく。(1)は撥音化, (2)は促音化の例である。(大橋勝男『新潟方言辞典』からの引用を(大), 長岡市で使用されている語を(長)で示している。)

- | | | |
|---------------------------------|--------------------|---------------------------------|
| (1) a. 此の連 (このつれ) /ko.no.tu.re/ | → | コンツラ /kon.tu.ra/ (大) |
| | /CV.CV.CV.CV/ | → /CVC_.CV.CV/ |
| b. なおのこと /na.o.no.ko.to/ | → | ナオンコト /na.on.ko.to/ (大) |
| | /CV.V.CV.CV.CV/ | → /CV.VC_.CV.CV/ |
| c. 見なきゃ /mi.na.kja/ | → | ミンキヤ /min.kja/ ¹ (長) |
| | /CV.CV.CGV/ | → /CVC_.CGV/ |
| | | |
| (2) a. 見つかる /mi.tu.ka.ru/ | → | メッカル /mek.ka.ru/ (長) |
| | /CV.CV.CV.CV/ | → /CVC_.CV.CV/ |
| b. おくかなし(古語) /o.ku.ka.na.si/ | → | オッカナイ /ok.ka.nai/ (大) |
| | /V.CV.CV.CV.CV/ | → /VC_.CV.CVV/ |
| c. 七十 /si.ti.zju:/ | → | シッチュ /sit.tju/ (大) |
| | /CV.CV.CVV/ | → /CVC_.CV/ |
| d. 一昨々年 /sa.ki.o.to.to.si/ | → | サキオットシ /sa.ki.ot.to.si/ (大) |
| | /CV.CV.V.CV.CV.CV/ | → /CV.CV.VC_.CV.CV/ |

今回調査した範囲では、中越方言では(1a), (1b)のように、助詞の「の」が撥音化する例が多く観察された。また、(1c)のように動詞が助動詞と接続し、文節単位になると撥音化が起きる場合があるようだ。促音化では/i//u/の母音が落ちる例が多く観察された。これは、この2つの母音が、他の母音に比べ発音される時間が短く、無声化しやすいためである(窪園1999: 41)。第1節で述べたように、撥音化と促音化には、軽音節構造の音節連続から一つの重音節((C)VC)を作り出すという共通性がある(窪園1998: 77)。(1), (2)の例でも重音節が形成されている。

また、中越方言特有の撥音化が観察される例として動詞の不可能形が挙げられる。不可能形の作られ方は東京方言と同様、動詞が母音終止語幹の動詞であるか、子音終止語

幹の動詞であるかによって形が決まるようである。まず、母音終止語幹の動詞である。¹¹

母音終止語幹の動詞

終止形	不可能形(東京方言) -rarenai	不可能形(中越方言) -ranne(：)	否定形(東京方言) -nai
始める(hazime)	始められない	始め <u>らん</u> ね(一)	始めない
建てる(tate)	建てられない	建て <u>らん</u> ね(一)	建てない
着る(ki)	着られない	着 <u>らん</u> ね(一)	着ない
食べる(tabe)	食べられない	食べ <u>らん</u> ね(一)	食べない
させる(sase)	させられない	させ <u>らん</u> ね(一)	させない
寝る(ne)	寝られない	寝 <u>らん</u> ね(一)	寝ない
投げる(nage)	投げられない	投げ <u>らん</u> ね(一)	投げない
見る(mi)	見られない	見 <u>らん</u> ね(一)	見ない

母音終止語幹の動詞の不可能形は、東京方言の語形の「れ」を撥音に変え、否定の語尾「ね(一)」(「無い」の母音融合が起きた形)を接続すると中越方言の語形ができる。つまり、東京方言と同じ「-rarenai」が語幹に接続し、そこで音韻変化が起きた形が中越方言の語形となる。こういった状況での撥音化は東京方言においても観察される(食べれない>食べらんない, 始めれない>始めらんない, など)。

中越方言でのみ観察されるのが子音終止語幹の動詞における撥音化である。

子音終止語幹の動詞

終止形	不可能(東京方言) -enai	不可能(中越方言) -anne(：)	否定形(東京方言) -anai
持つ(mot)	持てない	持た <u>ん</u> ね(一)	持たない
なる(nar)	なれない	なら <u>ん</u> ね(一)	ならない
買う(kaw)	買えない	買わ <u>ん</u> ね(一)	買わない
選ぶ(erab)	選べない	選ば <u>ん</u> ね(一)	選ばない
書く(kak)	書けない	書か <u>ん</u> ね(一)	書かない
飲む(nom)	飲めない	飲ま <u>ん</u> ね(一)	飲まない
貸す(kas)	貸せない	貸さ <u>ん</u> ね(一)	貸さない
歌う(utaw)	歌えない	歌わ <u>ん</u> ね(一)	歌わない
立つ(tat)	立てない	立た <u>ん</u> ね(一)	立たない
泳ぐ(ojog)	泳げない	泳が <u>ん</u> ね(一)	泳がない
習う(naraw)	習えない	習わ <u>ん</u> ね(一)	習わない

東京方言では、母音終止語幹動詞に-rare、子音終止語幹の動詞に-eのように、可能接辞が異形態を持ち、これにしたがって、不可能を表す形も、-rare-nai,-e-naiのように異なる形になる。「ら」抜きことばを使う話者では、-reと-e,-re-nai,-e-naiとなっていて、母音終止語幹動詞と子音終止語幹動詞に付く可能接辞の基底の形として同じ-reを想定することができる。これらに対して、中越方言の不可能形は、母音終止語幹動詞・子音終止語幹動詞ともに-(r)anne(:)の形を想定することができる。東京方言と中越方言の不可能形語尾をまとめると以下のようになる。

	母音終止語幹の不可能	子音終止語幹の不可能
東京方言	-rarenai > rannai	-enai
中越方言	-rarenai > -ranne(:)	-arenai > -anne(:)

さらに、中越方言では以下のような例も観察された。

- (3a)は撥音化, (3b)は促音化への変化である。(3)はどちらも助詞の「の」の母音が脱落することによって変化が起きている。また, 「の」に後続する音も「コ」, すなわち子音の/k/であり, どちらも同じ音である。つまり2つの例は全く同じ音環境にある。しかしながら, 一方は撥音へ変化, もう一方は促音へと変化している。同じ環境にありながら,

なぜこのような違いが起きているのであろうか。これは「脱落」という現象が、語のどこまで及んでいるかという違いによって起きていると考えられる。このことについて述べるため、まず、それぞれを純粋に「母音の脱落」だと仮定する。

(a)を母音脱落が起きているとした場合、

(a) $V \rightarrow \emptyset$: /na.o.no.ko.to/ \rightarrow /na.o.n.ko.to/ ナオンコト

となる。次に(b)を母音脱落とした場合、

(b) $V \rightarrow \emptyset$: /o.to.ko.no.ko/ \rightarrow /o.t o.ko.n.ko/ *オトコンコ

となり、「オトコッコ」とは異なる形が生成されてしまう。つまり、(b)を母音脱落とするならば、(a)のように撥音化が起きるはずである。しかしながら、(b)では促音化が起きている。このことは、(b)における脱落が、母音のみならず子音の素性にまで及んでいるためと考えられる。(a)では「の」の子音素性 [+nasal] がそのまま残ることで撥音化が起きている。一方(b)では、母音に加えて [+nasal] という子音の素性も脱落し、子音があるという情報は残っているが、その子音がどのような子音であるかという情報までは残っていないものと考えられる。

(3a) $V \rightarrow \emptyset$

/na.o.no.ko.to/	\rightarrow	/na.on.ko.to/
/CV.V.C V.CV.CV/	\rightarrow	/CV.VC.CV.CV/
[+nasal]		[+nasal]

(3b) $V \rightarrow \emptyset$, [+nasal] $\rightarrow \emptyset$

/o.to.ko.no.ko/	\rightarrow	/o.to.ko.C.ko/	\rightarrow	/o.to.kok.ko/	オトコッコ
/V.CV.CV.CV.CV/	\rightarrow	/V.CV.CVC.CV/	\rightarrow	/V.CV.CVC.CV/	
[+nasal]					

(3b)のような現象は、東京方言では観察されないのではないだろうか。元の子音を持っていた [+nasal] という子音の素性を落とした語形 (オトコッコ, オンナッコなど) が許される点から、中越方言では東京方言に比べて最適性理論で言う忠実性制約が弱いと考えられる。

さらに、中越方言では以下のような例も観察される。

- (4) それでも /so.re.de.mo/ → ソッデモ /sod.de.mo/ (長)
/CV.CV.CV.CV/ /CVC.CV.CV/

(4)の分析に入る前に、日本語における促音と撥音の現れ方を紹介する。例としてオノマトペを取り上げてみる。オノマトペには、パンパカ、パッパカ、ドンドコ、トットコ、などのように撥音や促音が登場することが多い。このとき、撥音と促音のどちらが登場するかは、それぞれに後続する音がどのような音であるかによって決まる。撥音は有声音、無声音どちらの前にも登場することができるが、促音は有声音の前に登場することはできない。これは促音の直後には有聲阻害音を避けるという制約が働いているためである (有聲重子音忌避制約 那須 2006:10)ⁱⁱⁱ。

<有聲重子音忌避制約> 促音の直後では有聲阻害音を避ける。

例：*バッパカ, *ドッドコ, *ダッダカ

先ほどの(3b)は、通常なら(3a)のように撥音化が起きる環境での促音化であった。子音の素性が脱落するという点では特殊であったが、促音に後続する子音は/k/ (無声音)であり、<有聲重子音忌避制約>に違反しない形であった。

これに対して(4)では、促音の直後に有聲音/d/が来ている。上記の他にも「それだとソッダト」「今度>コッダ」のような例も観察される。日本語には、促音の直後の有聲音を避けるという制約がありながら、中越方言では上記のような語形が許容されている。このように有聲重子音忌避制約には違反しながらも、1 モーラ音節・3 モーラ音節を避けるという音節構造制約は守られている。(3), (4)の例は、中越方言において、音節構造制約がほかの制約に比べ、いかに強く働いているかが読み取れる例である。最終的に重音節が形成されるのであれば、撥音になろうと促音になろうと、また、標準日本語で嫌われる音配列になろうと、中越方言では許されている。忠実性制約や有聲重子音忌避制

約に違反することはあっても、音節構造制約はしっかりと守られている。

2.2. 母音挿入

次に母音挿入（長母音化）による重音節形成をみていく。東京方言において、形容詞の意味を強調する際などに、後ろから第2音節目の母音を長音化し、「暗い>クラーイ」「汚い>キタナーイ」などということがある。これに対して中越方言では、第一音節の母音を長音化する現象が観察される。ただし、それらは東京方言でみられる長音化のように、強調などの付随的な意味を持たない^{iv}。東京方言の基本形、もしくはくだけた語形にあたる形に長音化がみられるのである。

(5)	東京方言	中越方言
高い	/ta.ka.i/	ターケ(一) /ta:.ke(:)/ (長)
軽い	/ka.rui/	カールイ /ka:.rui/ (長)

これらの例では、第一音節の母音が長音化することで、次のように重音節が形成されている。

(5)	/ta.kai/ >	→	/ta:.ke(:)/	/CV.CV̥V/	→	/CV̥V.CV(V)/
	/ka.rui/ >	→	/ka:.rui/	/CV.CV̥V/	→	/CV̥V.CV̥V/

例からもわかるように、長母音化がみられるのは3モーラ形容詞である。形容詞であっても4モーラ以上の語では長音化は観察されない。

(6)	短い	/mizikai/	→	*ミージカイ	/mi:.zi.ka.i/,	*ミジーカイ	/mi.zi:ka.i/
	明るい	/a.ka.ru.i/	→	*アーカルイ	/a:.ka.ru.i/,	*アカールイ	/a.ka:.ru.i/
	煙たい	/ke.mu.ta.i/	→	*ケームタイ	/ke:.mu.ta.i/,	*ケムータイ	/ke.mu:.ta.i/

このように、4モーラ以上の形容詞で母音の長音化をすると、中越方言で観察されない語形になってしまう。後ろから2モーラ目を長母音化する例は、東京方言でも観察されるものであるためここでは除外している。このように、実例をみる限りでは、3モーラの形容詞にのみ許される母音の長音化であるが、4モーラ以上の形容詞で重音節形成が

における促音挿入を紹介する。

2.4.1. 外来語における促音の挿入

中越方言に限らず、促音の挿入が行われている例はある。それが外来語における促音の挿入である。下記のような促音挿入は、元の語への忠実性を保つために行われている。

cut /CVC/ → *カト/CVCV/ → カット /CVC.CV/
bag /CVC/ → *バグ/CVCV/ → バッグ (バック) /CVC.CV/

日本語は開音節言語であるため、尾子音をそのまま保つことはできない。そのため、尾子音の後に母音が挿入されている。しかし、これらの外来語の形は開音節にただけでは得られない。元の語が/CVC/という重音節構造を持つことから、日本語に導入する際にも、その音節構造を維持しようとする忠実性制約が働く。そのため、促音が挿入され、上記のような/CVC.CV/という重音節をもつ音節構造となるのである。

2.4.2. 中越方言における促音の挿入

外来語における促音挿入は、忠実性制約を守る目的で行われていた。では、中越方言で観察される促音の挿入は、外来語における促音挿入のように、忠実性を守るために行われているのであろうか。いくつかの例から、中越方言における促音の挿入が忠実性制約によるものではなく、音節構造制約によるものであることを明らかにする。下記は中越方言で観察される促音挿入の例である。

- (8) a. へび /he.bi/ → ヘッピ /hep.pi/
b. 直 (じき)/ziki/ → ジッキ /zikki/
c. 舌 /sita/ → シッタ /sitta/
- (9) a. 暑い・熱い /a.tui/ → アッチェ /at.tje/
b. 短い /mizikai/ → ミジッケ(ー) /mi.zik.ke(:)/
c. やわらかい /ya.wa.ra.kai/ → ヤワラッコイ /ya.wa.rak.koi/

はじめに名詞における促音の挿入をみていく。東京方言の「へび」「舌」,「直」という

語は/CVCV/という軽音節構造から成る。中越方言では(8)のように、東京方言の語形に促音が挿入された語形が使用されている。これは、外来語の例とは異なり、忠実性を守るための変化ではなく、重音節形成を目的とした変化としか考えられない。このように、東京方言に比べて中越方言では音節構造制約が広い範囲で遵守されている。

次に、形容詞にみられる促音挿入を分析する。まず3モーラ形容詞であるが、2.2で分析した長母音化と同様、「熱い・暑い」がアツツイのように、形容詞を強調する際に促音が挿入される例は東京方言でも観察される。(9a)のように促音が挿入されている形が、基本形として使用されているのは中越方言の特徴であろう。次に4モーラ以上の形容詞をみよう。なお、これら形容詞の中越方言語形は、(9)に挙げたもの以外にも存在するが、促音が挿入されているという点から、上記のものを代表として挙げている。2.2節で見たように、3モーラ形容詞では母音の長音化を中心に重音節が形成されていたのに対し、4モーラ以上の形容詞では長音化による重音節形成が許されない。その一方で、4モーラ以上の形容詞では、(9b) (9c)のように、促音を挿入することによって重音節が形成されている。もちろん全ての形容詞でこのようなパターンが観察されるわけではないが、これらの例から、東京方言に比べて、重音節構造がより好まれるという中越方言の特徴が明確に読み取れる。

3. まとめ

2.1節では母音の脱落が重音節形成に関わっている例 ($V \rightarrow \emptyset$)、2.2節では反対に母音挿入、すなわち母音の長音化 ($V \rightarrow VV$) が関わっている例をみてきた。また2.3節と2.4節から、中越方言は母音だけでなく、子音を脱落させたり挿入したりすることで重音節化を図っていることが明らかとなった。東京方言では、母音を削除する促音化や撥音化が盛んであり、対して近畿方言では、子音が削除されるウ音便やイ音便が盛んである。ここから、東京方言は子音優先、近畿方言は母音優先の言語のように言われることがある。このように他の方言では重音節化において特定の方法に偏る傾向がある。その一方で、母音・子音両方による変化が観察される中越方言は、出来る限りの方法で音節構造制約を守ろうとしているのが分かり、したがって、他方言に比べ重音節化が徹底して行われていることが明らかである。これまで分析してきた例の他にも、「カガッポイ(まぶしい)」「〜クッサ(〜こそ)」「ソロット(そろそろ)」のような語が使用されている。このことから、中越方言は音節構造制約を守ろうとする傾向が非常に強く観察される。

参考文献

- ・窪菌晴夫 (1998) 『音韻構造とアクセント』 研究社出版
- ・窪菌晴夫 (1999) 『日本語の音声』 岩波書店
- ・黒田成幸 (1967) 「促音及び撥音について」『言語研究』 50巻 pp.85-99 日本言語学会
- ・斎藤純男 (2008) 『日本語音声入門』 三省堂
- ・真田信治, 友定賢治編 (2007) 『地方別 方言語源辞典』 東京堂出版
- ・尚学図書編 (1989) 『日本方言大辞典 下巻』 小学館
- ・那須昭夫 (2006) 「HLL 型オノマトへの形態・音韻構造」『文藝言語研究 (言語篇)』 50巻 pp. 129-142 筑波大学文芸・言語学系
- ・平山輝男編 (2005) 『日本のことばシリーズ 15 新潟県のことば』 明治書院
- ・藤本雅子, 箆宮隆之 (2003) 「『日本語話し言葉コーパス』にみられる促音化」『情報処理学会研究報告. SLP, 音声言語情報処理』 124巻 pp.193-198 情報処理学会
- ・湯澤質幸 (2005) 『音声・音韻探求法』 朝倉書店
- ・渡辺富美雄 (1979) 『新潟県方言訪問記』 野島出版

Abstract

Kubozono (1998) argues that both English and Japanese prefer heavy syllables to light or superheavy syllables, citing various diachronic changes and synchronic phenomena in those languages. The present article examines the formation of heavy syllables in the Chuetsu Dialect, and shows that this dialect exhibits a stronger tendency to make heavy syllables out of sequences of light syllables than the Tokyo dialect does.

The data of the Chuetsu Dialect were collected from *Niigata Prefecture Dialect Dictionary* (Ohashi, 2003) with additional examples that the present author collected in the Chuetsu region. This analysis reveals four types of heavy syllable formation in the Chuetsu Dialect: vowel deletion, vowel insertion (or, vowel lengthening), consonant deletion, and consonant insertion (or, gemination).

注

- i 拗音の音韻表記は、どのような音であるかに関わらず、「子音+j」という表記で統一している。
- ii 母音終止語幹動詞には、いわゆる「ら」抜きことばの形、すなわち「着れない」「見れない」の形も語幹の短い動詞を中心に见られるが、動詞により揺れがある。ここでは中越方言との比

較を分かりやすくするため「ら」抜きではない形を挙げた。

- iii 有声重子音忌避制約：元となる考えは、浜田1949, 黒田1967, McCawley1968, Ito and Mester 1995によるものである。
- iv 大橋(2000)は、強調の意味を含む際に、これらの語形が登場することが多いとしているが、筆者はこれらが強調を含んでいるとは考えていない。これらの語形は関東方言の「アチー」のような語形に対応するものだと考えられる。つまり、基本形よりくだけた形であるだけで、そこに強調の意味は含まれないと考える。